吉野秀雄全集

第九巻

吉野秀雄全集

第九巻

筑摩書房

吉野秀雄全集第九巻

昭和四十五年七月十五日第一刷発行
昭和五十二年五月二十日第二刷発行

著者　吉野秀雄
発行者　井上達三
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(二五二)七六五一(代表)
振替　東京　六―四一二三

印刷　多田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替いたします

吉野秀雄全集第九巻　目次

自歌自解

観ること・感ずること・表現すること……一三
作歌と療養……二五
時雨の唐招提寺……五〇
秋の室生路……五三
作歌余言……五六
法隆寺の歌……六七
西伊豆に旅して……七七
土佐の旅より……七八
紀行の歌について……八三
阿波の秋風……九四
薩南指宿温泉……九八
秋の志摩半島……一〇四
正月の歌……一〇八
奥羽三温泉行……一〇六
私の短歌作法　―近詠小註―……一一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

十年前の秋……一二七
瑞泉寺の庭に遊んで……一二〇
夏富士……一二五
梅雨の草……一二四
鎌倉の思ひ出……一二六
西伊豆安良里行……一二〇
季節の窓……一二九
正月の歌から……一四三
西伊豆旅情……一四八
飲食の歌から……一五四
人生の足跡・作歌の足跡……一六〇
歌と寺　―晩春と初夏の大和―……一七六
病床回顧・春四月の旅……一八〇

続・秋艸道人のこと

『寒燈集』読後感……一九九
『会津八一全歌集』書評……二〇四

秋艸道人の歌……二〇七
『自註鹿鳴集』書評……二二三
会津八一……二二四
私のすきな詩歌――奈良春唱……二二七

続・現代短歌論

短歌の文学性……二三三
深秋歌話 ―生活の真実を掘りさげること―……二三八
正岡子規五十年忌に因んで……二三一
写生念々不停流……二三五
子規・左千夫・節・赤彦の歌……二四七
斎藤茂吉「ひとり歌へる」……二五八
斎藤茂吉氏の近業……二六〇
『つきかげ』新年の歌……二六四
土屋文明「六十三首」を読んで……二六九
『松倉米吉全集』を読む……二八〇
徳田白楊の歌……二八七

亡友米川稔のこと……二九八
秀歌鑑賞……三〇五
歌よみの小感慨……三二二

続・現代俳句私観

子規晩年の句について……三四三
『仰臥漫録』に見る子規の生活……三五九
村上鬼城について……三六七
『野守』小感……三八八
松本たかし句評……三九七
『みそさざい』最近号を読んで……四〇六
『遅日』私抄……四一五
爽雨近作瞥見……四二六
『菜殻火』最近号漫読……四三四
鶴句鶏評……四四一
国語愛低下のこと……四四八
新年俳趣……四五五

漫然たる俳談……四六〇

詩人思慕・二人の小説家＝拾遺

高村光太郎さんの詩……四六七
砕雨短歌小感……四七〇
露伴の女性――「対髑髏」のお妙……四七八
『赤穂浪士』解説……四八一
『帰郷』解説……四八七

続・通りすがりの大和

長谷川等伯の「松林図屏風」……四九七
ルオーと「納涼図屏風」……四九九
日本美の再発見――鎌倉……五〇五
鎌倉大仏測定聞き書……五一一
高村光太郎さんの小品展……五一五
国吉康雄の言葉……五一九

前衛書道について……五三三
流行の書道について……五三五

続・良寛のこと

良寛調といふもの……五三九
良寛詩余響……五三三
月の兎の歌……五三九
良寛の飲食生活……五四一
良寛の歌一首について……五五六
良寛出家出郷の年代について……五五八

古典研究・余録

古き国うたの美しさ……五六七
万葉集巻第十一の歌六首……五七〇
むかしばなし ―商・商人・市など―……五七七
古今集漫読抄……五八〇

西行の話……五八五
実朝と無常感……六〇〇
現代語訳・入出二門偈頌……六〇九
百人一首漫語……六一九
秋の夜のしらべ　―『閑吟集』について―……六二八
『越後土産』を読む……六三三
『樵路句集』を読む……六四四
『古柏集』めでたし……六六〇
神楽舎翁の想ひ出……六六五
伊丹末雄君の万葉研究について……六八二
「朱鳥」よみ方のこと……六八七
解　題……六九五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

吉野秀雄全集第九巻　散文拾遺

自歌自解

観ること・感ずること・表現すること

短歌とはどんなものか

短歌が、第一句（初句）五音、第二句七音、第三句五音、第四句七音、第五句（結句）七音――つまり五句三十一音の形式にもとづく短詩だといふことは、日本人で誰一人知らぬ者はないし、国語の教科書などで習つて、万葉の歌だとか、啄木・牧水・白秋・茂吉の歌だとか、十首や十五首そらんじてゐない者もなからうが、さて、人の詠んだ作品を鑑賞するだけでは満足できないで、自分の心に感じ胸におもふことをこの形式に托して言ひ現はせたらどんなに生活にうるほひを増すだらうかと、ほのかな希望をいだいてゐる人もまた決して少なくはなささうだ。さういふ婦人たちにむかつて「表現のたのしみ」を刺戟し、それなら自分もひとつ歌を作つてみようといふ欲望をかきたてることがわたしに課せられた役目であるが、もともと「表現」とは他の人の共鳴を呼んでこそいふに値ひする言葉なのだから、その「たのしみ」もひとりよがりであることは何よりもいましめねばならない。そこで、一体短歌とはどんな性質の詩で、どんな態度で作ればいいかの根本をめぐつてわたしの考へを述べることが、「表現のたのしみ」をほんたうに身につける目的へのいちばんの

早道にならうかと思ふ。

五・七・五・七・七の形式は、短歌を成り立たせる絶対の条件で、短歌を作らうとする限り、この定型を尊重しなければならぬのは当然のことだ。これを無視したものは、短歌以外の何かであるにすぎない。世間には、定型の制約を不愉快な不自由さだときめて、あたまからきらふ人もあるが、わたしたちは、その不自由な定型にさまざまな内容をあてはめ、形式と内容とが摩擦し角逐するところに、散文では出せぬ短歌独特の響きのうまれるよろこびを知つてゐるし、また定型の目安があるからかへつて作りやすいといふことも事実だし、たくさんの人々が同じ定型によつて作るので親愛の情が湧き、比較の便宜がえられるともいへるし、定型かならずしも窮屈な束縛とばかりは解してゐないわけだ。

正規の三十一音にならずに、何音かの過不足を生ずることがあつて、これを字余り・字足らずといつてゐる。初句は六音・七音のこともあり、逆に四音のこともある。第三句は六音の方が味はひの濃いこともありうる。第四・五句は一首の急所で、力こぶを入れねばならぬため、往々八音になり、特に結句は九音にもなりかねぬことがある。かういふ字余り・字足らずによつて調子の乱れることを、正調に対して破調といふ。破調には破調の妙味があり、これをかもしだす必然性も否定できないが、さりとて作りはじめの人が破調の許しに甘えて勝手気ままに形をくづすことには賛成しがたい。やはり実直に指折り数へて正調に合致させようと骨折ることが肝腎だ。破調は定型あつての破調で、定型をぶちこはす作用ではなく、定型に常に強く引かれての変化だといふことを忘れてはならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.